

令和4年度 第4回 国立市学校給食センター運営審議会だより

運営審議会会長 山上 真哉

記録担当 四小・五小

第4回 国立市学校給食センター運営審議会

日時 令和5年1月26日(木) 午前9時～午後12時30分
場所 国立市内農家さんの畑見学→愛和小学校にてエディブル教育を学ぶ→
国立市立第一給食センター会議室にて学校給食の試食
出席委員 10名 欠席委員 2名
事務局 4名 土方勇(所長)、久保直子(栄養士主査)、島崎陽子(栄養士・会計年
度任用職員)、宮本浩介(事務主査)

議題 実際に国立市の給食に出されてる地産地消の野菜について、実際に作っ
てくれている農家さんの生の声を聴くことで、農家さんの努力や直面している問題を知ること。
どのような状況の下で国立市の給食が成り立っているのか知識と理解を深めること。

エディブルスクールヤード＝食育菜園運営を教科ごとに紐づけるカリキュラムに取り入れ
た多摩市愛和小学校を訪問。この教育手段が子供や職員、学校、地域にもたらすメリットに
ついてお話しを伺う。今年新しい給食センターが完成する国立市で、どんな【食育】が展開
できるのか？その可能性を考える上で、参考とすべき1つの【食育】の形を学ぶこと。

『国立市内で親子2代で農家を営む佐伯光貞さんのお話』

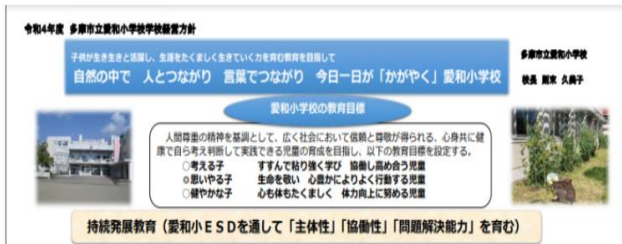


←佐伯さんのネギ畑。普通の住宅の隣
に畑がある光景は国立では珍しくない。
その理由もお話を聞いて分かった。
国立市の農家が抱える問題が背景
にある。

親子で農家を営む佐伯光貞さん→
地産地消の国立給食野菜の維持する為の
努力や直面する現実的な問題を語る。
この現実を多くの市民に伝えたい。



『 多摩市立愛和小学校からエディブルスクールヤード教育を学ぶ 』



■多摩市立愛和小学校

子どもが生き生きと活躍し、生涯をたくましく生きていく力を育む教育を目指して、エディブル・スクールヤード＝食育菜園を取り入れる。

食育菜園とは、学校の菜園で子ども自身が野菜を栽培・収穫・加工して味わい、コンポストから土づくりまで、循環する生命(いのち)の仕組みを、教科ごとの学びとも結び付けるカリキュラムを学年に応じて用意し、子ども達の『生きる力の根っこを育む』教育手法である。

食育菜園とは、学校の菜園で子ども



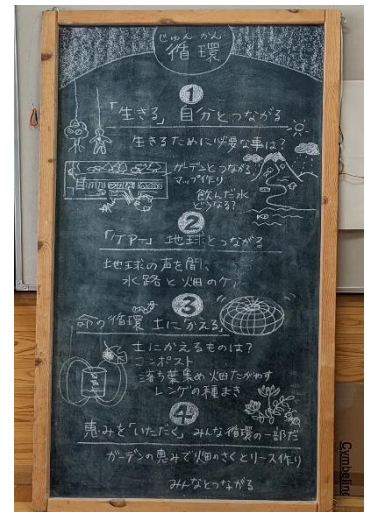
←学校において、子ども自身の手で食と農を繋げることによって、自身の食と農との関係を体感するだけでなく、自然や生き物への理解、友達との関係作り、自己肯定感の向上などを通して、『いのち』を学ぶ全人類的な教育の手段となっている。(日本農業新聞2022年10月23日掲載より)

■エディブル・スクールヤードとは・・・

1,995年カルフォルニア州バークレー市にある公立中学校、マーティン・ルーサーキング Jr. ミドルスクールの校庭に、

地元オーガニックレストランのオーナーシェフのアリス・ウォーターズ氏によって創設された食育菜園からスタートした20余年に及ぶ実績のある、画期的な教育モデル。

「いのちの循環」を子供達に説明している看板→→→→



『 建設中の国立市の新給食センターを見学 』



←完成までもう少しの新給食センター！！実際に現地に行ってみると委員からも感嘆の声が！新しく快適で便利で機能的な施設から、沢山の【笑顔】が生まれる事間違いなし。これからの国立の給食の発展が益々楽しみでならない。

視察を終えて感想

審議委員からは沢山の熱い感想があり、今回はまとめたものを掲載。

【くにたち野菜】

国立市の農家さんの「畑を相続する際に、田畑を手放さないと税が納められないので、畑の一部を手放した。」との言葉が印象的でした。

農家の継続には、課題が2つあり、1つは税金、もう1つは後継者とのことでしたが、社会問題を身近に感じました。また、「畑にゴミを捨てる人や犬の糞をさせる人、農作物を盗む人がいるので困っている」との話に心が痛みました。

以前から、近隣の生産緑地がどんどん宅地になってしまう現状が非常に残念で、存続できないものかと思っていました。さらにおうちをかけるように、「畑の一部を手放し、宅地になって家が建つと、隣接する畑の一部が建物の影で日光が当たらなくなってしまうため、作物が育てられなくなり土地の一部が畑として利用できなくなってしまうとのこと」切ない限りです。今回の視察は、その背景の一部を直接知る機会となりました。私は、東京でありながら田畑と里山のある景観は、国立市の特徴で、未来の子供たちにも残したい国立市民の宝と考えています。

田畑と里山のある景観に心が癒されたり、自然と親しんだり、農作物が育つ様子を観察したり、里山に訪れる様々な生き物を身近に観察したりすることができる体験は、子供たちの健やかな成長の糧となり、これからの未来をたくましく生きるための力の一つになると考えています。成長過程で、身近な環境が与えてくれるこうした体験は、宝物だなあと常々思っています。現在、給食センターで、使用する野菜の一部を市内や近郊の農家さんから直接仕入れ、地産地消につなげているとのことでしたが、他にも、地元農家さんが持続可能な形で生産できる仕組みや田畑や里山の保全ができる方法があると良いなと思いました。

地元の農家さんを応援したい気持ちでいっぱいになりました。

跡継ぎ問題や畑の維持管理、物価高などさまざまな課題がある中で、国立市内の子供たちのためにご尽力くださるお姿に感銘を受けました。

地産地消はとても大切ですが、適切な支援も必要であると感じました。

農家を継がれる若い方には誇りをもって野菜作りをしていただくこと、そのためにできることを委員それぞれが考える貴重な機会となりました。

【エディブルエデュケーション】

エディブルエデュケーションについて、学年ごとに食物を育て、調理し、食べるという体験を通すというご説明の中で、以前小学3年生の娘が『すがたをかえる大豆』について音読をしていて、元々は国語の授業ではありますが、家で「これも大豆、これも大豆」と興味をもっていて、国語以外の教科についても横断的に学習になるということ、少しではありますが実感いたしました。現状は、情勢もあり調理し食べるということが難しいかもしれませんが、興味を持ってもらう方法を考える良い機会となりました。

「生き方、食べ物、行動」を考える教育が食を通じて行われていました。食への関心が持てるよう工夫されたカリキュラム、食を楽しめる学習、子供たち・保護者・学校が育て、かかわっていくことで食の大切さを知ることができる学びの場でした。自分たちで育てた野菜の様子から「いま、地球で何が起きているか」を子供たち自らが考え、行動する「子供たちの生きる力」をはぐくむ食育の重要性と可能性を感じる事ができました。

【新給食センター】

給食センターは、今度新しく給食センターができていい機会ですので、見学や試食会を各学校でぜひ実施いただき、食育を支援していただきたいと思いました。

国立市としては食育という観点での独自の取り組みや企画、方針はこれまでありませんでした。しかし市民の皆様や保護者の皆様の熱い要望により、国立市では令和4年から市全体の食育ビジョンの策定に着手しました。新給食センターは国立市全体の食育拠点の1つという新しい役割も担っていくため、今回の視察は特に重要でした。

【まとめ】

どの課題も一朝一夕に解決できるものではなく、また物理的な何かを購入したり稼働させたりすれば解決できる質のものでもない。【食育】とはこれからの国立市、これからの世界を担っていく大人を育てる重要な指針であるとして国立市独自の食育ビジョンをしっかりと策定し、運用していく必要があると強く感じた視察となった。